



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	各附属学校・園の研究内容（研究年報）(fulltext)
Author(s)	
Citation	東京学芸大学附属学校研究紀要, 45: 217-228
Issue Date	2018-09-00
URL	http://hdl.handle.net/2309/150123
Publisher	東京学芸大学附属学校研究会
Rights	

「自分の学びに自信がもてる子ども」を育む学校の創造

— 学び続ける共同体をつくる授業デザイン —

附属世田谷小学校

1. 研究主題について

「自分の学びに『自信』をもてる子ども」を育む営みの中から、本校の子どもたちが「学び続ける共同体」になっていくことを願う本研究主題を設定して3年目を向かえ、当初予定をしていた一括りの研究を終えることができた。初年度は「自信」そのものに焦点を当て、「自信」とはどのようなものなのか、また各教科・領域で考える「自信をもった子ども」はどのような姿なのか、授業実践を通して検討・交流した。

2年次は初年度に研究した「自信」そのものを、本校の子どもたちにより引き寄せ、「自分の学びに自信がもてる」子どもをどのように捉えているかを各教科・領域の授業実践を通して検討・交流した。その中で、本校の子どもたちの学ぶ姿をモデル化した「個の学びのモデル」を抽出し、そのモデルを使った授業デザインの在り方を模索した。

3年次にあたる本年度は、「自分の学びに自信がもてる子ども」像や、「個の学びのモデル」のさらなる検討を経て、そのモデルの中で子どもの姿の様相を3つのPhaseに分けた。また、各教科・領域の本研究テーマに即した学びの期待できる単元が、どのようにつながると考えているかを示した重点単元表を作成し、その中に、生かして伸ばしたいその子の資質・能力を示した。これによって、各教科・領域の描く「自分の学びに自信がもてる子ども」が、どのような学びの連続で支えられているかを見取ることができると考えた。

この3年間を通して、教師の子どもを見取る視点への変革が実現できたこと、またそれによって自ずと、授業デザインの仕方に変化をもたらすことができた点を、研究の成果としたい。

2. 研究内容

昨年度の研究成果を踏まえ、各教科・領域の提案を作成し授業実践を行った。またそこでつかんだ成果をもとに研究発表会を開催し、今後の研究への指針を得ることができた。

- (1) 各教科・領域での「自分の学びに自信がもてる子ども」の姿をどのように描いているかを各教科・領域の提案にまとめた。また、「学び続ける共同体」につながる授業のあり方を子どもの姿で表すなど、各教科・領域の目標、育てたい力、育てたい姿、教師の手だてをまとめ、指導計画作成をした。
- (2) 昨年度検討した子どもの見取り方や、子どもの学習意欲を授業展開に位置づける授業デザインの在り方を検証する授業実践を行い、その成果を研究発表会の提案授業として実践し参会者とともに検討した。
- (3) 昨年度見いだした「個の学びのモデル」を実際の授業実践に生かしながら、より子ども学びを見取る視点を明確にした。
- (4) 研究発表会を行い、本研究のまとめを、授業実践と本研究発表会についてを協議する「全体協議会」の場を設けた。また、その最後に本研究で継続してご指導くださった東京大学教授の藤江康彦先生に総括していただいた。
- (5) 校務分掌に「総合学習部」を新設し、平成3年度より継続してきた本校総合学習の枠組みの刷新に着手すべく、これまでの理論・実践の振り返りを行い、ポスト総合学習の方向性を検討した。

3. 成果と課題

- (1) 上記した「自分の学びに自信がもてる子ども」の姿の明確化、「個の学びのモデル」を生かした授業デザインによる授業実践。そして研究発表会を開催できたことは大きな成果である。また、本研究を通して教師の子どもを見取る新たな視点ももてたこと。そして、それをもとに授業改革への指針ももてたことも大きな成果であるとする。
- (2) これからは本研究を生かし「子どもが自分にとって意味ある知を生み出していくための要件の追究」「子どもの自信が発揮される学習環境の原理の探究」「教科と総合との関係づけ：教科部提案の精緻化」「『自分の学びに自信をもつ姿』の整理」「世田谷小の『学び文化』『学校文化』の生成、継承のシステムの構築」が課題であろうと藤江康彦先生からご指導をいただいた。(文責：齊藤 豊)

「こえる学び」を生む学習環境デザインの追究

附属小金井小学校

1. 研究テーマについて

昨年度2月に、本校では研究発表会を開催し、「理解を深め、知を創造する子の育成」をテーマとして3年間にわたって研究に取り組んできた成果を公開することができた。そこでは、子どもたちは教師がデザインした活動、空間、共同体等の学習環境に、主体的に結びついて学んだり、思考する姿があった。一方で、活発に思考を進めることのできない子どもの姿や子どもの学びを深められない教師の出方や学習環境デザインの妥当性に課題も見られた。これらの反省から、学習環境は教師によってデザインされるものであるが、子ども自らが学習の主体であることを自覚して、学びを豊にしていくなような子どもに育てて欲しいという願いが生まれた。

そこで、今年度の研究は、3年計画の1年目として、まず、研究テーマをどのように設定するのかを検討した。そして、時間をかけ、教員全員で協議する回数を増やし、昨年度までの研究の評価や新学習指導要領の公布、わたしたち教員の目の前にいる児童の実態等を考慮しながら話し合った。そして、学校研究のテーマを『「こえる学び」を生む学習環境デザインの追究』と設定し、初年度の研究のスタートを切った。

2. 本年度の研究と方法

本校では、上述のように、学校研究テーマを『「こえる学び」を生む学習環境デザインの追究』と設定し、まずは子どもの実態を把握し、授業においてどのような姿が「こえる学び」なのかを検討した。その上で、「こえる学び」を生み出すために、授業における活動、空間、共同体といった学習環境をどのようにデザインしていくのかを考慮することにした。具体的には、各教科部毎にテーマを設定し、各教科授業における「こえる学び」とは何かを考え、それを生み出す学習環境デザインについて研究を進めた。そして、授業提案の機会がある教科は、研究授業を通して子どもの姿で提案・協議し研究を深めた。授業提案のない教科は、考え方を紙面提案し、全体で協議した。年度末には、全体研究理論及び各教科部の理論、実践報告をまとめ、研究紀要として編集した。

3. 本年度の研究の経過と概要

3. 1. 校内授業研究会の経過

第1回授業研究会	2年生	国語	授業者：鈴木 秀樹	講師：中川 一史先生（放送大学教授）
第2回授業研究会	6年生	家庭	授業者：西岡 里奈	講師：望月 一枝先生（日本女子大学客員研究員）
第3回授業研究会	4年生	体育	授業者：佐々木賢治	講師：仲宗根森敦先生（東京学芸大学講師）
第4回授業研究会	2年生	生活	授業者：富山 正人	講師：櫻井 眞治先生（東京学芸大学教授）
第5回授業研究会	4年生	理科	授業者：葛貫 裕介	講師：寺本 貴啓先生（國學院大学准教授）

3. 2. 夏季研究会・各教科部内授業の概要

8月25日、28日、29日の3日間、夏季研究会を行い、外部講師として、白梅学園大学大学院特任教授の無藤隆先生と京都大学教育研究科准教授の石井英真先生の2名にご講演いただいたり研究テーマと副題について協議を進めたりした。また、校内の研究会にて授業研究を行わなかった教員全員、部内授業として授業を公開し今年度の研究を深めた。

4. 本年度の研究成果と課題

「こえる学び」を生むために、「学習環境デザイン」を切り口にして、授業研究を通して議論を重ねた。しかし、「こえる学び」について教員同士が共通理解をした上で検討するまでは至らず、今後も議論を要する。さらに、授業における「こえる学び」をしている児童の姿を想定し、その基となるコンセプトをより一層明確化し授業構成をめざしていきたい。そして、そのコンセプトに基づいた、「学習環境デザイン」について来年度以降も研究を深めていく。

（文責：牧岡 俊夫）

国際バカロレアの理念やPYPのよさを取り入れた 新教科「探究科」の創設

附属大泉小学校

1. 研究の目的

次期学習指導要領は、平成28年12月の中教審答申にあるよう、2030年頃の社会の在り方を見据えて改訂されたものである。「グローバル化社会」という言葉が聞かれるようになって久しいが、2030年頃の社会を考えると、予測困難な変化が伴う現代の社会の様相がより一層加速していることは、想像に難くない。このような時代を生き抜いていくために必要な資質・能力を、中教審答申では「健康・安全・食」「地域創生」「主権者」「伝統や文化」「資源の有限性」などのトピックと共に例示している。本校では、このような国際社会を生き抜いていくために必要な資質・能力（国際的資質・能力）は、自立と共生の精神と共に育まれるべきであると考えた。本研究では、既存の教科を再編した新教科を開設し、国際的資質・能力を育成する教育課程と、それらを評価する具体的な方法を示すことを目的とする。

2. 本年度の取り組み

(1) 編成した教育課程の特徴

既存の教科を統合・再編しながら、自立と共生という視点で探究科の領域を設定し、探究的な学習を展開していくことで、国際的資質・能力が育まれると考える。各教科で身に付けた汎用的な能力が活用されるという点では、総合的な学習の時間と類似しているが、概念的に理解していく内容が明確に、そして系統的に示されているという点が大きく異なる。

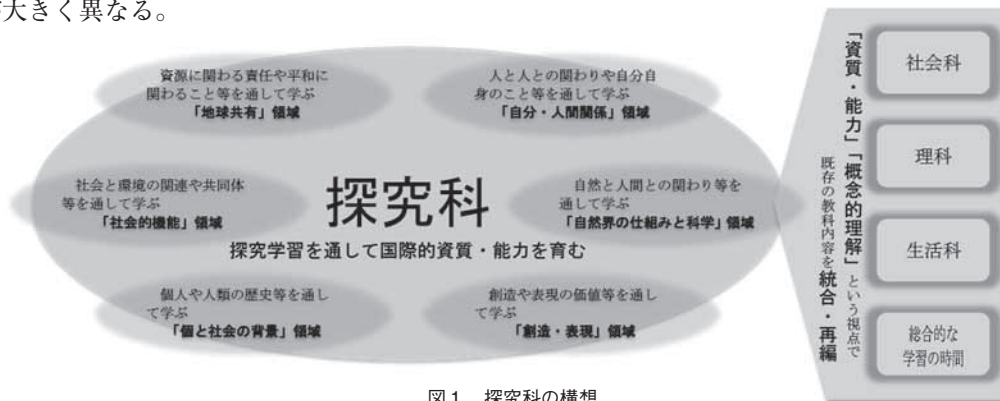


図1 探究科の構想

(2) 評価シート（ルーブリック）の開発・実践・改善

（図2）のようにして評価基準と記述後も併せて示した評価シート（ルーブリック）を開発した。このシートは、形成的評価を児童と教師で共に行っていくことを意図して作成している。そのため、学習過程に応じて、段階的に作成することに大きな特徴がある。

※東京学芸大学次世代教育推進研究機構と共同で、シートの電子化について研究を継続している。

学がこと の中心 がどれくらい わかってい るか確認し よう	大切に したい見 方	↑ つながっている → ↓ 役割が どうなるか	3 よくできた	2 できた	1 おもしろ	グループの題材（魚・干物・鳥・びわ・花・おはやし・歴史・うちわ）についてのことをポスターや発表原稿に書いている。 （例） ・〇〇（びわ・干物・魚・うちわ）、「どんなつりになっているのか」「どんな種類があるのか」などがわかった。 ・〇〇（歴史・鳥・植物・おはやし）などのことをくわしく知ることができた。	「事象を知る」段階 ↓ 「事象についての理解を深める」段階 ↓ 「学びを見つめ直す」段階
			3 よくできた	2 できた	1 おもしろ		
			自然と商売のつながり・富浦の人々のつながり・自然と人のつながりなど、つながっている様子を、ポスターや発表原稿に <u>くわしく</u> 書いている。 （例）・富浦で商売が盛んな「びわ」や「花の栽培」は、自然や気候の・・・という持ちようが関係していることとわかった。盛く盛っている商売を通して、たくさんの人がつながっていることもわかった。	自然のこと、商売のこと、地域の文化のことを、ポスターや発表原稿に書いている。 （例） ・干物やうちわを売ることや、魚をとって売るなどについて、くわしくわかった。 ・富浦の自然や歴史が、・・・であるということがくわしくわかった。	グループの題材（魚・干物・鳥・びわ・花・おはやし・歴史・うちわ）についてのことを書いている。 （例） ・〇〇（びわ・干物・魚・うちわ）、「どんなつりになっているのか」「どんな種類があるのか」などがわかった。 ・〇〇（歴史・鳥・植物・おはやし）などのことをくわしく知ることができた。		
			自然と商売のつながり・富浦の人々のつながり・自然と人のつながりが、富浦の人々の生活に役立っていることや、 <u>互にかかわる人々の思いを</u> 、ポスターや発表原稿に書いている。 （例）びわや花の栽培、干物やうちわを売ること、魚をとって売ること、自然や気候などのつながりを役立っている人がいることがわかった。たずさわっている人は、・・・のような思いをもっている。 ・歴史・鳥や植物・おはやしなどのすばらしさを伝えることが、富浦の生活に役立っていることがわかった。たずさわっている人は、・・・のような思いをもっている。	自然と商売のつながり・富浦の人々のつながり・自然と人のつながりが、 <u>富浦の人々の生活に役立っている</u> ことをポスターや発表原稿に書いている。 （例）びわや花の栽培、干物やうちわや魚の商売と、自然や気候のつながりを役立っている人がいることがわかった。 ・歴史・鳥や植物・おはやしなどのすばらしさを伝えることが、富浦の生活に役立っていることがわかった。	グループの題材（魚・干物・鳥・びわ・花・おはやし・歴史・うちわ）についてのことを書いている。 （例） ・〇〇（びわ・干物・魚・うちわ）、「どんなつりになっているのか」「どんな種類があるのか」などがわかった。 ・〇〇（歴史・鳥・植物・おはやし）などのことをくわしく知ることができた。		

図2 児童に示す評価基準の例

（文責：菊池 良幸）

平成29年度 研究報告

附属竹早小学校

1. 本年度の研究

本校における本年度の研究内容は以下の2点であった。

- (1) 「学びを深める場をつくる」を研究主題に、竹早地区幼・小・中の連携研究に取り組む。
- (2) 「教育課程特例校」の申請に基づき、中心的な活動である「自己実現活動」についての校内研究会を進める。

2. 各研究の内容

2. 1. 幼・小・中連携研究

昨年度までの連携研究の課題として、竹早地区の教育における具体的な教師の手立てを明らかにすることを課題に「学びを深める場をつくる」を研究主題と設定した。今年度は教科・領域を中心に組織した実践部会による実践事例をもとに、理論部会中心に「学びを深める場」を概念規定していくために「学びを深める」の概念を明らかにすることに取り組んだ。

6月に実践研究会を行った。幼小中連携研究に位置づく授業研究会は下表の通りである。

実践部会分科会	講 師	対象学年	授業者
国 語	中村 和弘 (東京学芸大学)	第5学年	茅野 政徳
算数・数学	中村 光一 (東京学芸大学)	第2学年	山田 剛史
理 科	小野瀬倫也 (国士舘大学)	第6学年	金田 知之
音 楽	猶原 和子 (江戸川大学)	第4学年	徳富 健治
図工・美術	小林 貴史 (東京造形大学)	第2学年	桐山 卓也
技術・家庭・栄養	仙波 圭子 (女子栄養大学)	第5学年	福地香代子
体 育	松田 恵示 (東京学芸大学)	第5学年	久我 隆一

2. 2. 幼小研究会「主体的で協同的な姿勢や態度の育成」の実践及び検証

幼小の活動研究会を通して「主体的で協同的な姿勢や態度の育成」を研究テーマに実践・検証を行った。幼小連携研究に位置づく授業研究会は下表の通りである。

月 日	学年	授業者	講 師
5月16日	3	岩岡 敬祐	多田 孝志 (金沢学院大学)
12月8日	4	佐藤 正範	佐伯 胖 (田園調布学園大学)
1月19日	2	桐山 卓也	藤井 千春 (早稲田大学)
2月6日	5	久我 隆一	鈴木 聡 (東京学芸大学)
2月21日	4	徳富 健治	多田 孝志 (金沢学院大学)

3. 成果と課題

- (1) 幼・小・中連携研究における本年度の主な成果は、「学びを深める場」について明確な概念規定には至らなかったものの、幼・小・中の教員で協議し、実践を重ねることで、その方向性と課題を得たことである。
- (2) 子どもの「主体的で協同的な姿勢や態度」を見取るための5つの観点を設定し、それが教員の協議の場において有効であることを確かめることができた。5つの観点は以下のとおりである。

①A 「材に興味をもち向き合っている」の観点による検討

①B 「自ら「できるようになりたい、追究したい、解決したい」という欲求に根差した課題や問題を見つけようとしている」の観点による検討

②A 「見つけた課題や問題を解決するために（活動に自己を関与させながら）活動内容を理解したり、発展させたりしようとする」の観点による検討

②B 「見つけた課題や問題を解決するために（活動に自己を関与させながら）学び方や活動への取り組み方を自覚的に深化させている」の観点による検討

②C 「見つけた課題や問題を解決するために（活動に自己を関与させながら）協同的なかわりを求めようとしている」の観点による検討

この5つの観点で子どもの姿を教員が利用しながら、竹早地区幼・小の実践の質を高めていくことが課題である。

(文責：山田 剛史)

平成29度 研究報告

附属世田谷中学校

1. 研究の概要

今年度より「世田谷中学校で育てる『21世紀型能力』～各教科が目指す深い学びを通して～」という研究テーマのもと研究を進めることとなった。各教科においては、研究主題にもある深い学びについて、授業づくりを通して具体化することに取り組んだ。その経過について毎月の研究会の中で各教科から提案してもらい、深い学びについての職員共通の認識を深めていった。各教科の研究と平行し、今年度は特別の教科道徳について、本校としてどのように取り組んでいくかということを検討した。校内に各学年主任、道徳主任、各学年研究部員を構成員とするプロジェクトチームをつくり、その中で検討を行った。特に、本校でこれまで行ってきた生活学習の中で道徳として扱ってきたものを整理し、各学年において、どのような内容について力を入れて道徳の指導をしていく必要があるかを明らかにした。また、教科横断的カリキュラムについて検討するために、夏季研究会では、言語能力、情報活用能力、問題発見力、問題解決力という4つの資質・能力について検討を加えた。ここでの検討を通して、問題解決の過程がおおむねどの教科においても、「問題設定」「計画（情報の収集）・情報の精査・選択」「決の実行」「ふり返る」「問題発見」というように整理できることがわかった。そこで、この過程の中で深い学びを実現するためのスキルについて検討することになり、各教員がこれまでの実践を振り返り、どのような思考スキルが授業の各場面の中で使われているかを提案し、深い学びの実現に向けて検討を加えていった。

2. 研究の内容と経過

2. 1. 講演会

8月の校内研究会の中で、東京学芸大学准教授 高橋 純先生を講師にお招きし、「主体的・対話的で深い学びとその実践へ向けて」という演題で講演をしていただき、本校の研究テーマである、深い学びについての理解を深めた。

2. 2. 授業研究会

今年度は6月17日（土）に実施し、120名を超える参加者があった。実施形態については、学校研究テーマを決めて1年目であり、また、その検討についたばかりの時期であったので、今年度は授業研究会という形態での実施とした。公開授業では、各教科がテーマのもと、授業を通してこれから必要となる授業、教育についての提案を行った。

2. 3. 校内授業研究会

校内授業研究会として1回実施した。校内研究会という位置づけではあるが、ホームページに案内を掲載し、外部の教育関係者の方も参加できるような形で実施した。実施時期と内容については以下の通りである。

9月11日（月） 授業者：篠塚 昭司 教諭

第1学年 社会 課題解決型授業でめざす深い学び

社会科地理的分野「世界各地の人々の生活と環境」「移民と生活・文化」

2. 4. 現職教員研修

現職教員研修として、数学、英語は春と夏の2回実施し、理科は夏に実施した。各教科とも、本校の実践をもとにこれからの授業、教育について考える場となった。

2. 5. 主な社会貢献

本学学生のみではなく、東京大学や横浜国立大学など他大学の教員免許取得希望者に対しても授業を公開した。また、福井県など他県、市、他附属学校からの視察を受け入れた。受け入れるのみではなく、本校教員出向き、授業をし、研修講師として中学校の授業改善に資する活動にも取り組んだ。

（文責：研究部長 鈴木 誠）

平成29年度 研究報告

附属小金井中学校

1. 研究主題と方向性

平成27年度から3ヵ年計画で「学ぶ意欲を持ち、追究していく生徒の育成」を研究主題として活動を進めてきた。初年度は「学ぶ意欲」に注目、2年次には「意欲の高まり」から「学びの質の深まり」につなげていくことを目指し「深い学びの創造」に焦点をあてて研究を進めた。今年度は、副題を「「深い学び」と教科の本質」と設定し、「深い学び」と教科が持つ魅力的で特徴的な見方・考え方の関連を中心にして追究した。

2. 研究の取り組み

研究主題にある「学びを追究する姿」は、「既習した知識や技能を活用して、意欲をもって挑戦していく姿」と共通理解し、その捉え方には教科固有の概念に由来するこだわりが存在することが判明した。また「深い学び」の概念を『習得した知識や技能、思考力・判断力・表現力等を活用し、その過程を楽しみながら、意欲的に教科の本質に迫る学び』とし、学ぶこと自体に面白さを感じる現象が継続的されていくプロセスと捉えた。この「深い学び」が教科それぞれの本質から乖離することなく、日々の授業実践の中で生まれることを目指し研究に取り組んだ。

3. 教育研究協議会

11月17日（金）教育研究協議会を開催し、主題研究の成果を発表した。

教科	授業主題（授業者）
国語	1年：災害を伝える「ことば」（愛甲修子）
	2年：命を見つめ生きる力を育む「言葉」の往還 正岡子規と秋山真之（菅 俊輔）
	3年：戦争と向き合う「ことば」～ヒロシマ・ナガサキ～（川嶋正志）
社会	1年：銚子の現状とそれを乗り越えようとする人々（田崎義久）
数学	1年：立方体の見え方とその前提（柴田 翔） 2年：図形の論証（権沢公一）
理科	3年：力学（金子真也）
音楽	3年：コードネームの学びを活かしたクラスセッション（田川聖旨）
美術	1年：「学び問い続ける」ためのきっかけづくり（大根田友萌）
保健体育	体育 3年：体育理論「文化としてのスポーツ」～実技を通して学びを深める～（上野佳代）
	保健 2年：健康な生活と疾病予防～依存症～（中谷千恵子）
技術家庭	家庭 3年：クレジットカード利用について考える（石津みどり）
英語	3年：Our School Life ～学校紹介～（青柳有季）

4. 校内授業研究会

- * 第1回 6月14日 保健体育 白波瀬勇太 1年C組「タグラグビー」
- * 第2回 7月12日 理科 宮村連理 2年B組「化学変化と原子・分子」
- * 第3回 9月13日 数学 柴田 翔 1年B組「資料の活用」

5. 成果と課題

本校の「研究で求める生徒像」を軸として、「深い学び」を追究してきた。そこには、教科の本質に関する理念ともとれる深い理解が不可欠であること、教科特有のプロセスによって育まれることを確認することができた。この「深い学び」は、今後の授業づくりにおいても重要な視点となることが想定された。

（文責：上野 佳代）

平成29年度 研究報告

附属竹早中学校

1. 今年度の研究

竹早地区連携研究として主題「学びを深める場をつくる ～子どもの姿と教師の手立てから探る～」に取り組んだ。今年度は、11月19日（土）に予定していた幼小中合同公開研究会が火災事故の影響により中止となったが、これまでの主体性を育む幼小中連携カリキュラムの創造と検証に関する研究の成果を土台に、第7期研究の初年度として「学びを深める場」に関する基礎的考察を行った。公開研究会で発表する予定であったその成果と授業実践は、研究紀要にまとめる形に代えた。

また、本校独自の取り組みとして、教員の授業力向上を目的とした校内授業研究会を1月19日（金）に実施した。一つの授業を全教員で見合い、それについて議論を行い、自分の授業を見直すよききっかけとなった。

2. 研究の内容

2. 1. 連携研究の組織と活動内容

連携研究は、連携委員による理論研究部会と全教員による実践研究部会の2部会体制で進めた。

(1) 理論研究部会：学びを深める場分科会と発達分科会の2分科会体制で取り組んだ。

①学びを深める場分科会では、「学びを深める場」について、主に「学び」「学びを深める場」を理論的に検討した。文部科学省が示す「深い学び」や各教科領域が考える「学びを深める」を検討した結果、竹早地区が考える「学びを深める」の方向性ととも、次年度に取り組むべき課題を見出すことができた。

②発達分科会では、竹早地区の研究の基礎理論に位置づけてきたステージ・ステップを、次年度から整理更新していくことを目標として、そのための方法の検討を行った。今年度は先行研究の調査を中心に研究を進めた結果、「教師の手立て」について明示されたものが見あたらなかったところから、次年度は、教師が「学びを深める場」を計画する際の指針となるような理論を生成するために、本表の分析から進めていきたい。

(2) 実践研究部会：第6期までの言語、社会、自然、表現、健康、人間のグループを解体し、幼稚園、国語、算数数学、社会、理科、音楽、図工美術、体育、技術家庭、外国語、人間、養護の12の教科領域に改編した。

各教科領域では、「学びを深める」について各教科領域の特性を踏まえてどのように捉えるかを検討した。そして、その検討結果に基づいて実践を行い、そこでの子どもの姿から、各教科領域が考える「学びを深める」についてさらに知見を深めることができた。

2. 2. 公開授業

以下の表は、幼小中連携研究の一環として行われた授業研究会と中学校独自に行った公開授業の詳細である。なお、上述したように公開研究会とそれに伴う事前研究会を、今年度は実施していない。

日時	教科	授業者	講師	教科	授業者	講師
6月16日	国語	堀内 泰	中村 和弘（東京学芸大学）	社会	石戸谷浩美	大澤 克美（東京学芸大学）
	数学	小野田啓子	中村 光一（東京学芸大学）	美術	山田 猛	小林 貴史（東京造形大学）
	道徳	菊地 圭子	松尾 直博（東京学芸大学）	家庭	酒井やよい	仙波 圭子（女子栄養大学）
1月19日	理科	勝岡 幸雄				

3. 本年度の成果と今後の課題

本年度の成果は、第7期研究のハード面である組織を構成したこと、また「学びを深める場」について、明確な定義を提案するまでには至らなかったものの、試行錯誤する中でその方向性と課題を得たことの2つが挙げられる。ここで得た課題を解決し、今年度実施することができなかった第7期最初の公開研究会を開催し成果を提案することが、次年度の大きな目標である。また、次年度から大学と品川区との連携によるCCSS事業も始まる。本事業は、国立大学附属学校の新たな可能性を期待された事業という位置づけにある。従って、その研究方法の整備も喫緊の課題である。附属学校の使命と役割を自覚し、本事業に取り組んでいきたいと考えている。

（文責：森 顕子）

平成29年度 研究報告

附属高等学校

1. 研究の方向性

今年度の本校における研究の方向性は、昨年度からの取り組みを継続し、発展させていくことである。具体的には、次期学習指導要領の改訂に向け、「資質・能力の育成」という観点のもと、カリキュラム・マネジメントを実践し、実践事例を蓄積させていくことである。各教科の授業の改善はもちろんのこと、本校の教育活動全体の向上を目的としている。それと同時に、本校の魅力の発信、次期学習指導要領への対応、働き方改革など、様々な観点での本校のカリキュラムの改善を実現させていきたい。

2. SSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）・SGH-A（スーパー・グローバル・ハイスクール・アソシエイト）指定事業関連研究

SSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）は事業の継続が決定し、今年度より2期目の活動に入った。2期目ははじめの2年間では、主に1期目の課題を追究することに力点を置いている。具体的には、本校が掲げた3つのキー・コンピテンシー「高度科学・技術社会の問題を発見する力、科学的プロセスと踏んで問題解決する力、グローバルに発信する意欲と語学力」の育成を実現するカリキュラムとその評価方法の構築を目指すものである。また、探究活動の整備、タイ国チュラボーン高校との交流事業、様々な理数系のイベントなど多くの事業を実施した。今後、探究活動のさらなる充実、高大接続の拡大など、課題として取り組んでいきたい。

3. 第16回 公開教育研究大会

平成29年6月24日（土） 会場：東京学芸大学附属高等学校

研究主題：コンピテンシー・ベースのカリキュラム開発（2）～「本質的な問い」とパフォーマンス評価の充実～
シンポジウムテーマ：探究活動を通して「パフォーマンス評価の充実」を考える

講師：仲矢 史雄先生（大阪教育大学科学教育センター准教授）

昨年度からの継続で「資質・能力の育成」という観点で、13個の授業開発を行い、公開した。また、11個の教科・科目で協議会を実施し、主にパフォーマンス評価について議論を深めた。シンポジウムでは、仲矢先生に加え、3つの高校から先生方をお招きし、探究活動の評価について議論した。また、公開研での成果を附属高校研究紀要にまとめ、今後続くカリキュラム開発の基礎を構築した。

4. 第19回 情報教育公開研究大会

平成29年10月3日（火） 会場：東京学芸大学附属高等学校

研究主題：普段使いのICT ～利活用する教師としての力量形成～

全体会テーマ：「共有」に関するICTの利活用

昨年度からの継続で「共有」をテーマに、Google ClassroomやGoogle Form、反転授業や分析ソフトでの探究など、幅広くICTを活用した5個の研究授業を実施した。

5. その他

現職教員研修講座、全国附属学校研究大会での発表、国際交流等、さまざまな方面での研究活動を実施した（詳細は附属高校研究紀要参照）。中でも現職教員研修講座では、すべての教科・科目の授業を公開し、多くの視察を受けるとともに、授業や評価のあり方について議論を深めた。

（文責：齋藤 洋輔）

平成29年度 研究報告

附属国際中等教育学校

「国際社会で活躍する人材育成」を目的に設立された本校では、国際バカロレア（以下、IB）の教育システムに基づく教育実践をしている。2014（平成26）年度にはスーパーサイエンスハイスクールに、2015（平成27）年度にはスーパーグローバルハイスクールに指定され、さらに2016（平成28）年度よりIBのディプロマプログラム（以下、DP）がスタートし、新たな取り組みを重ねている。

1. 平成29年度 授業研究会の実施について

昨年度に引き続き、「グローバル化社会に生きる資質・能力の育成」を研究主題とし、IBの理念や論点整理で提起されている育成すべき資質・能力の3つの柱を視野に入れて、IBの理念に基づく探究的で学際的な学びによって、生徒が身に付けるべき資質・能力とその評価のあり方を追究している。現在本校では、生徒の資質・能力の育成に対して、学習者の視点に立って、どのような仕組みで、学校全体としてどのように資質・能力を育成していくのかということを示す体系的な「学びの地図」の作成を目指している。今年度の授業研究会（11月24日に開催）では、次期学習指導要領の方向性とIBプログラムとの親和性を整理し、本校で実践している「目標・指導・評価一体型」の取り組みをより可視化することで、本校におけるカリキュラムマネジメントの方向性を公開した。

2. 国際バカロレア（IB）ディプロマプログラム（DP）開始について

本校は2015（平成27）年3月にDPの認定を受け、国公立大学附属学校としては初となるIBの一貫教育を2016（平成28）年4月に開始した。本校で実施するDPは、日本でもまだ数少ない一部のDP科目の授業と評価を日本語で実施するDPである。今後、一条校としてのDPの教育実践を積み上げていくことになる。

3. スーパーサイエンスハイスクール事業4年目の動向について

2014（平成26）年度に指定を受けたSSH事業は今年度4年目を迎えた。これまでの成果と課題を踏まえて、以下のように事業を進めている。

〈研究開発課題名〉

国際バカロレアの趣旨に基づく理数探究プログラムの開発および実践

【仮説1】日本の現代的な教育課題に対するIBプログラムの有効性

【仮説2】理数探究の充実による学際的な学びに対する取り組みの意義

【仮説3】6年一貫教育におけるルーブリックを用いた観点別評価の定着

4. スーパーグローバルハイスクール事業3年目の動向について

2015（平成27）年度に指定を受けたSGH事業は今年度3年目を迎えた。これまでの成果と課題を踏まえて、以下のように事業を進めている。

〈研究開発構想名〉

「多文化共生社会を支える組織力・対話力・実行力の育成」

【仮説1】課題研究の主軸の概念化と課題意識の焦点化

—「国際教養」の整備と体系的プログラム構築による課題研究の質の高度化

【仮説2】課題研究とその評価に際しての外部機関との連携強化

【仮説3】グローバル・コンピテンシーの評価規準・評価方法の策定

（文責：鮫島 朋美）

主体的・協働的な学びを育む支援

— 学ぶ意欲を高め、学びを深める評価場面の工夫 —

附属特別支援学校

I. 問題と目的

平成29年4月、特別支援学校幼稚部教育要領及び特別支援学校小学部・中学部学習指導要領（以下、新学習指導要領）が公示された。新学習指導要領における小・中学部学習指導要領総則「第3編第2章第4節学習評価の充実」の中で、学習評価の実施にあたっての配慮事項が3項示されている。その中の1つに「児童又は生徒のよい点や可能性、進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにすること。また、各教科等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点から、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること。」（下線は筆者による）と記載されている。つまり、新学習指導要領においては、単元や題材などの学習のまとまりの中に評価場面を明確に位置付け、その方法を工夫することの重要性が言われているのである。一般に評価場面とは、子供が自分自身を評価する（自己評価）場面、子供同士がお互いを評価する（相互評価）場面等に大別される。このような評価場面において子供たちの中にはどのような学びが育まれているのであろうか。まず1つは、子供たちは他者（主に教員や友達）から褒められたり認められたりすること、また自分自身の学習活動を振り返ることを通して、学ぶことに対する興味や関心を高めることができる。さらにもう1つは、子供たちが、他者（主に教員や友達）とのやりとり（教員が友達を評価している様子を見たり、自分が他者を評価したり、他者から評価されたりする活動）を前提として、自他の違いを通して学ぶことで、新たな気づきを得たり自分の考えを再構築したりすることができる。つまり、学習活動として評価場面を授業に位置付け、その方法を工夫することで、評価場面自体が「主体的・協働的な学びの場」となり、子供たちの学ぶ意欲を高め、さらに学びを深めることに繋がると考えた。そこで、各学部段階において、子供たちの主体的・協働的な学びを育む評価場面の工夫を、授業実践を通して検討することを目的とした。

II. 方法

全体主題を受けて各学部でテーマ及び対象とする授業を設定し、評価場面に焦点を当てた授業実践を行った。その際、各学部段階における評価場面の考え方として図1に示す段階性を提案し、各部の授業実践の参考として活用することとした。

III. 研究成果とまとめ

今年度は、「学ぶ意欲を高め、学びを深める評価場面の工夫」について取り組んだ。ここでは、幼稚部段階から高等部段階まで共通して評価場面の工夫について授業実践を通し検討することで、各学部段階における自己評価や相互評価の在り方についてその一部を明らかにすることができた。今後は、「主体的・協働的な学びを育む支援」というメインテーマの下これまで各学部が取り組んできた事が、ライフステージを超えてどのように繋がるのかを詳しく検討していくことが必要である。

（文責：齋藤 大地）

引用文献

- 文部科学省（2017）特別支援学校幼稚部教育要領及び特別支援学校小学部・中学部学習指導要領
東京学芸大学附属特別支援学校（2015）研究紀要 第60号。
東京学芸大学附属特別支援学校（2016）研究紀要 第61号。





幼稚部 	・教員からの評価がまずは重要な段階 ・褒められる、認められるなどの他者（教員や友達）から肯定的な評価を受ける機会を多く経験し、自信を付け、学ぶ意欲を丁寧に育てていく段階
小学部 	・友達との関係が広がり、友達からの評価が重要になってくる段階 ・できたことを自分自身で振り返ったり、他者（主に友達）から褒められ認められる経験を積むことで、自信を付け、学ぶ意欲を高めていく段階
中学部 	・相互評価を通し、学びを深めてほしい段階
高等部 	・できないことについても自分自身で振り返ったり、他者からの否定的な評価を受け入れたりすることを通し学びを深めていく段階

図1 各学部段階における評価場面の考え方

平成29年度 研究報告

附属幼稚園（小金井園舎）

1. 研究の概要

本園では、「試行錯誤する子どもと教師」という研究テーマの3年次として、「幼児の試行錯誤のプロセスに影響を及ぼした他者との関わり」「試行錯誤する幼児に援助する際の教師の試行錯誤」について検討した。保育場面の中からエピソードを抽出し、幼児の試行錯誤のプロセスに対し、どのような幼児の姿がどのような影響を及ぼしたかを考察した。更に、援助する教師が、援助を行う前後を含め、どのような点に葛藤したり、悩んだり、選択したりしながら援助を行ったかを考察した。

特別支援教育に関する研究にも取り組んできた。校内委員会では本学の大学教員と連携しながら、特別な配慮を要する幼児への指導について話し合っている。また、保護者に対しても保護者同士が交流する場を設け、多方面から支援が受けられる体制作りを目指している。

2. 園内研究会の方法・内容

2. 1. 定例の研究会、保育検討会を設け、幼児の試行錯誤に影響を及ぼした他者のかかわりや、試行錯誤する幼児に援助を行う際の教師の試行錯誤について検討を行った。
 - ・週2回の園内研究の実施：幼児の試行錯誤の事例の分析、検討
 - ・保育検討会（5月19日、5月29日、6月9日、11月6日、11月10日、11月13日）
2. 2. 現職教員（幼稚園教諭、保育士、小学校教諭）学生、大学教員を対象にした研究協議会を開催した。
 - ・11月24日（約150名参加）
 - ・講演：無藤 隆 先生（元白梅学園大学）
 - ・指導：赤石元子先生（明治学院大学）田代幸代先生（共立女子大学）河邊貴子先生（聖心女子大学）福元真由美先生（本学幼児教育）

3. 特別支援教育に関する研究の方法・内容

3. 1. 校内委員会を設け、専門の大学教員と本園教員が協議した
 - ・年3回（5月23日、10月17日、1月23日）
 - ・校内委員会の実施：対象児観察、個別の指導計画をもとにした話し合い
 - ・講師：伊藤良子先生（本学教職大学院）、林安紀子先生（本学教育実践研究支援センター）
3. 2. 特別な配慮を要する幼児をもつ保護者の会を実施した
 - ・レモンの会（8月28日）：在園児保護者と卒園児保護者との情報交換や相談の場

4. 成果

- ・幼児の試行錯誤のプロセスである「欲求・目的」「対象との関わり」「気づき・学び」のどの場面に対しても周囲の幼児や教師などの影響があった。試行錯誤の発達に応じて、「具体的な関わり」が多かったものが、次第に「言葉を介した関わり」も増えてくるという変化が見られた。
- ・試行錯誤する幼児に援助を行う教師は、幼児の試行錯誤を解決することのみを優先するのではなく、幼児の試行錯誤を自分の中に取り込みながら、これまでの経験や知識、幼児に対するねらいなどを総合的に判断しながら、援助の方法やタイミングについて試行錯誤しているということがわかった。
- ・校内委員会を通して、特別な配慮を要する幼児の理解を深め、指導に活かした。また、保護者の会を開き子育て支援及び、特別支援教育の理解、及び支援体制作りの推進を図った。今後も大学教員と連携しながら推進していく。

（文責：中野 圭祐）

平成29年度 研究報告

附属幼稚園（竹早園舎）

1. 今年度の研究

竹早地区3校園、幼小中の連携研究として、『学びを深める場をつくる ～子どもの姿と教師の手立てから探る～』という新テーマを掲げ、研究を進めてきた。幼稚園部会として、幼稚園における「学びを深める」とはどのようなことかを、子どもの姿の事例検討を積み重ねて考えてきた。附属学校研究会では幼児教育分野の先生方や附属幼稚園小金井園舎の教員と『大学4年間の総合的実習プログラムの見直し』をテーマに、学生の育成に向けて意見を出し合った。

2. 連携研究の内容

（竹早地区幼小中連携の研究の詳細については、竹早小・中のページも参照）

2.1. 実践研究部会〔幼稚園分科会〕での取り組み

今年度は、幼稚園の教員（常勤2名、非常勤4名）で部会を作り、幼稚園における「学びを深める姿」「学びを深める環境づくり」について、事例を通して協議してきた。幼児が「もっと知りたい、もっとやってみよう」と自ら取り組む姿を「学びを深める姿」とし、その背景や環境を探り、指導に生かすようにした。

2.2. 実践研究

保育検討会	6/15	4歳児・5歳児	岩立園長による指導
	11/9	4歳児・5歳児	
公開研究会			中止（小学校での火災事故のため）

3. 幼小校内研究会

幼小の枠組みで行われる活動研は、新任者が自分の授業を公開し、教員同士が互いを知る機会になるものと、研究部からの提案のもの、学年部会からの提案のものがある。今年度は年間9回実践研究を行い、共通のテーマを『主体的で協同的な姿勢や態度の育成 ～子どもにとって意味のある活動の追求～』とし、各教員の提案のもと協議を行っている。今年度は特に「自己実現活動」における子どもの姿を評価する視点として5つの観点を出し、それに基づいて、活動提案を行い、子どもの姿と教師のかかわりを見取ってきた。この5観点については、幼稚園の子どもを評価するのにふさわしい言葉に変換し、協議した。

幼稚園からの提案 1/31 助言者 山田有希子先生（附属幼稚園小金井園舎副園長）

4. 校内委員会

5歳児学年では、週1回特別支援の先生が来園し、配慮を要する幼児の様子を見たり、担任と指導の方法について協議したりした。今年度は、学期に一度、園内の教員と子どもの実態と支援の方法について協議する機会を設け、共通理解して保育に臨んだ。

5. 成果と課題

今年度は、公開研究会が中止となり、研究についての意見を交換できる機会がもてなかった。幼稚園における「学びを深める場」について、分かってきたこと、まだ不十分などところがある。園内で行ってきた研究の成果を紀要としてまとめ、全国の幼稚園に発信していくこと、それを踏まえて次年度の公開研究会を行っていくことが課題である。また、幼小中、幼小と合同の研究テーマの中で、幼稚園の今日的課題を意識した研究を進めていきたい。

（文責：八木亜弥子）